



岩崎先生のご逝去を悼む

吉池雄藏

日本地球化学会名誉会員，東京工業大学名誉教授 岩崎岩次先生は，2005年11月13日，東京都区内の病院で逝去されました。享年96歳でありました。

先生は1909年(明治42年)新潟県西蒲原郡赤塚村(現新潟市赤塚)でお生まれになり，新潟で旧制中学，高等学校を卒業後，東京帝国大学に入学されました。1933年同大学理学部化学科を卒業，同大学院に進み，1938年大学院卒業後は，帝国学士院の補助により，火山の地球化学的研究に従事されました。先生の恩師であります木村健二郎先生と岐阜県苗木地方に試料採取に行かれたのが地球化学への入門時だったと，晩年，先生はおっしゃっていました。その成果は苗木地方の鉱泉のラドン含量と題して(地鉱誌)1932年に発表され，これが先生の最初の論文と思われる。その後伊豆大島，小笠原，浅間山等の火山岩の主成分・微量成分を分析されましたが，現在のような機器分析装置はほとんど無い時代，疾病に冒されながら大変御苦労された事を後年伺いました。また先生は実試料の分析を行いながら，岩石の化学分析法も工夫改良され，我国でのケイ酸塩分析の草分けとなりました。

1939年4月九州帝国大学に新設された理学部に赴任されました。学部学科運営にも御活躍されながら，

多くの学生を指導されて数十報の論文を報告されました。研究対象は岩石・鉱物に加えて別府，湯布院，阿蘇周辺の間歇泉あるいは本邦西部地域の温泉水の主成分，放射性成分等に渡っています。

1950年4月からは東京工業大学に移られ益々研究の幅が広がり，化学的な視野から，火山活動の究明に多くの成果を上げられました。東京に戻られてまもなく，先生が1933年に読売新聞社主催の噴火口探検に参加された伊豆大島三原山で噴火が起こり，この溶岩流中からガスを採取されたのが，その後の火山研究の出発点になったと伺いました。質量分析装置を逸早く火山ガスの分析に用いられ，また岩石を加熱し，放出される微量ガスを分析されるなど創意に富んだ研究をされています。火山ガスの研究を集大成されたマグマ発散物の分化現象の論文は先生のご創意によるもので，その後の火山ガス研究の基礎とされています。一方，1950～51年溶岩流試料を系統的に採取して，化学成分の分布を検討し，地球化学におけるサンプリングの重要性を示されました。また，先生の研究室では地球化学試料を対象とした，多くの分析法を確立され，例えば，その一つである塩化物イオンの定量操作は世界的に広く用いられ，各種の公的分析法にも採用されました。

更に先生は早くから天然水の研究も手掛けられ，すでに50年以前から水質環境問題についての提言をされ，1950年代中頃に工業用水協会の設立に参画されていました。水の研究から派生したことだと思いますが，先生は趣味の一つに，噴水を見て回り，写真に収めることを喜びとしておられました。晩年，国内はもとより世界各地の噴水，水場を紹介した随筆を書かれています。先生は，著書も数多く上梓されましたが，中でも地球化学概説（1953）は我国での地球化学教科書の魁ともいえるものでした。また火山の化学（1948）およびその改訂版である火山化学（1970）は，外国でも類書のない独自のものです。

先生は，1970年4月から東邦大学理学部化学科の専任教授になられましたが，実際には東邦大学理学部の創成期から非常勤講師として授業ならびに卒業研究の指導を担当され，1980年までに学部学生3千数百名に講義をされ，卒業研究では百数十名の学生が先生に直接御指導をしていただきました。毎年春には，新4年生と共に大学近くの谷津バラ園に出向き，バラや他の草花を觀賞されるのを楽しみにされていました。

先生は地球化学会の前身である地球化学研究会時代からの会員で学会の諸役員をされ，東京工業大学時代には2度に渡り学会開催を行って頂きました。学会活動初期の頃の講演数は約20題程と伺いましたが，今日の日本地球化学会の隆盛は，先生の草創時期における多大な労に負うところが大きいとおもいます。ありがとうございました。

数年前，先生の卒寿の宴の席で，お話し下さったことの後編を白寿のお祝いのお席でお伺いする事になっていましたが，それも叶わぬ事になってしまいました。ここに慎んで哀悼の意を表し，心からご冥福をお祈りいたします。

合 掌